校長室通信

令和７年９月１日号
志免町立志免西小学校
髙良　祐治

夏休みが終わり、再び学校に子どもたちの元気な笑顔と声が戻ってきました。様々な経験をして、パワーアップした子どもたちが繰り広げる「志免西劇場」を楽しみにしているところです。

夏休み明けということで、図工の作品など、夏休みの課題を抱えて登校している子どもが多くいました。「自分の力でやり遂げた」という満足感と充実感を感じながら前期後半を迎えたことだと思います。この気持ちをこれからの学校生活に活かしてほしいと思います。

生成AIと子どもたち

ChatGPT をはじめとする生成AIの広がりはすさまじく、スマホには当たり前のように搭載されていますし、パソコンで何かを検索していると、一番上に生成AIが作成した回答が表示されるようになりました。生活の様々な場面で使われることが当たり前になってきており、今や欠かせないものとなっています。

調査によると、小学生の ChatGPT の利用経験は50.7%であり、半分の子どもはパソコンやスマホで生成AIを利用してみたことがあります。また、学校の勉強や宿題をするときに生成AIを使ったことがある小学生は 36.6%です（いずれも「ニフティキッズの AI に関する調査(2025 年 5 月)」）。

また、生成 AI の提示する回答も、十分に“使える”ものに進化しており、一読しただけでは、それが生成 AI によるものかどうか、判別するのは難しくなってきています。

これからこのような技術の進化は続いていくでしょうし、生活をより便利にしていくために、活用は広がっていくと思います。振り返ってみれば、電卓が家庭に広まっていったときも、「子どもが自分で計算しなくなる」「子どもの計算力が落ちる」など、いろいろ騒がれましたが、しばらくすると、誰も何も言わなくなりましたし、昔に比べて子どもの計算力が落ちたというデータは見たことありません。

要は、“うまく”使っていく態度と能力を身につけていく必要があるのだと思います。たとえば、国語の物語文で主人公の心の変化について、自分の考えをノートに書いているときに、「こんな感じ…」と頭に思い浮かんでいるのだけど、どう表現していいのか迷っているときなどに、「こんな感じ…」の部分を生成 AI に説明して、「うまい表現を考えて」と依頼すれば、生成 AI は、ウェブ上にあふれる様々な情報やデータから適した表現を探し出して、候補を表示してくれます。その中から「あーっ、これこれ！私が言いたかったことはこれなのよ。」という表現に出合うことができたときは、気持ちがすっきりするとともに、この表現方法が身につきます。

このように、生成 AI をまずは自分の頭でしっかりと考えてから、補助的に使うようにすれば、子どもたちの学習効果も高まっていくのではないかと思います。

ちなみに、子どもが自分で考えたものか、初めから生成 AI を使ったものかを判断する簡単な方法があります。それは、その文章を本人に声に出して読ませてみることです。他人が作った文章は、他人行儀な読み方になるものです。

生成 AI と豊かな人生を

しかし、人間は弱い生き物でもあります。初めから生成 AI に「丸投げ」してしまっても、それなりの、いや子どもの能力をはるかに超えた模範的な解答や回答を示してきます。すると、だんだん初めから生成 AI を頼るようになってしまうでしょうし、その結果として自分で考えようとしない人間になってしまうでしょう。

人間は創造性があるから豊かに生きられるのだと思います。創造性は、思考力や判断力や想像力などをはぐくまないと生まれないと思います。この「深く考えてみる」「自分なりの決断を下す」「一見見えないものに思いをはせてみる」など、人間らしい部分を生成 AI にゆだねてしまうのは、豊かな人生の大切な部分を放棄してしまうようなものだと思います。

効率化、省力化、簡略化、負担軽減など、人間は同じ成果を得られるのであれば、できるだけ楽しようとしてきました。これはとても大切なことだと思いますが、一見遠回りで無駄に思える「本当の道筋」を知っているからこそ、その良さがわかるのだと思います。子どもたちには、学校教育で、本当の道筋の探求にじっくりと取り組んでほしいと思っています。